

茶室「堪庵(たんあん)」

堪庵は、江戸時代初期（1603～1868 年）に京都の貴族が好んだ数寄屋造りの大きな建物の一部である伝統的な茶室です。さまざまな素材や角度の天井、裸木や土壁などの自然で装飾されていない素材など、構造全体の建築要素は、1620 年から桂離宮に建てられた茶屋の影響を反映しており、素朴な茶屋です。

堪庵の中心部は、畳、障子、ドア、南側全体に広がる広々としたベランダ、装飾的な床の間を備えた、書院座敷スタイルの 8 畳の応接室です。（床の間）。玄関口（玄関）は西を向いており、北側の応接室の後ろにはお茶や調理器具を準備する水屋があります。

小さい 3 畳の茶室は、建物の東側にあります。茶師の金森宗和（1584–1656）に好まれた、大徳寺真珠庵「庭玉軒」をモデルにしたと考えられています。部屋の中央にはくぼんだ炉床、装飾的な床の間があり、主人が座っているエリアは柱として機能する自然に枝分かれした木材によって仕切られています。

堪庵は、1958 年に茶道の愛好家である上田堪一郎によって博物館に寄贈されました。元々は明治古都館の南側にありました。1966 年に博物館の東の庭の現在の場所に移されました。当時は、茅葺き屋根が銅板に置き換えられ、水屋の裏側の庭と部屋も改装されました。